

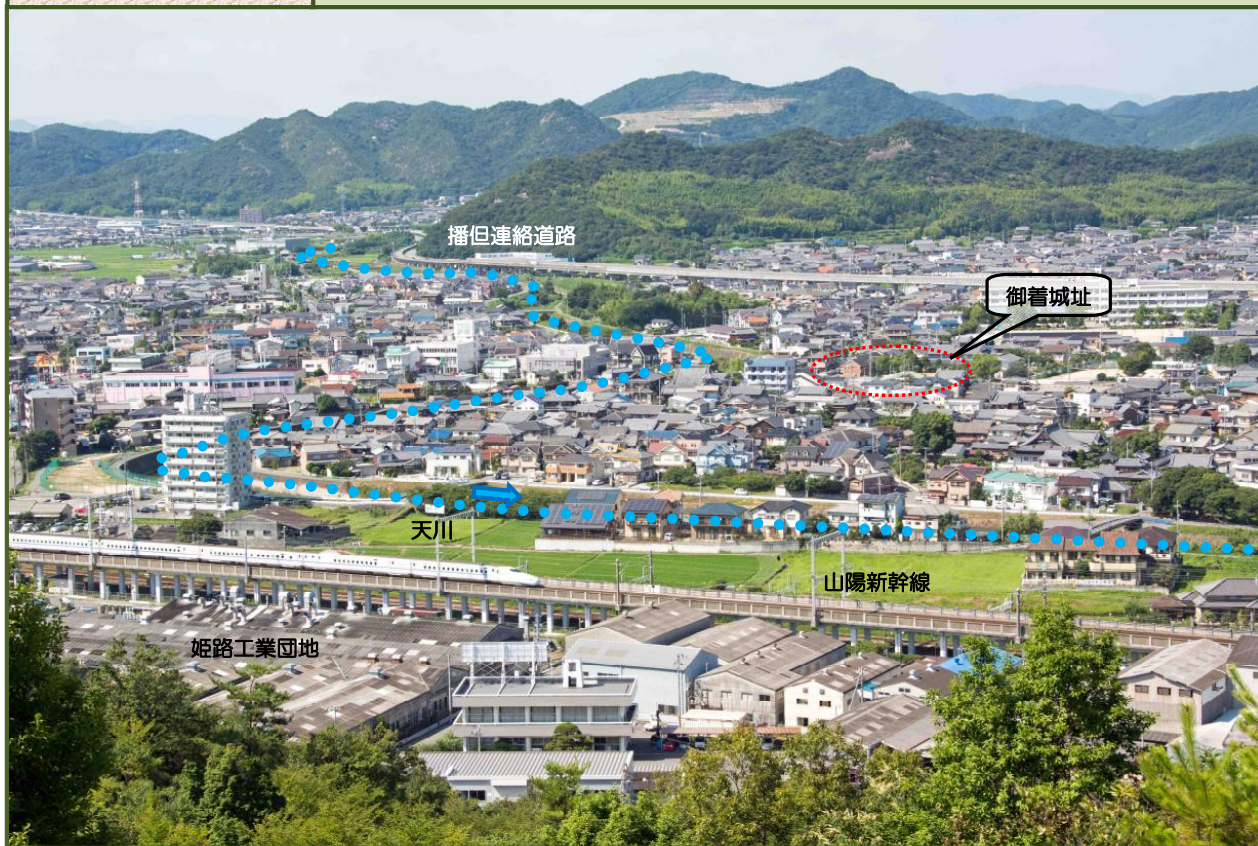


写真-1 火山中腹から御着城址や天川を撮影（平成29年7月）

■ 秀吉が布陣した火山から御着城を望む

写真-1 は、JR 御着（ごちゃく）駅の南南東約 700m にある火山（ひのやま：写真-2）の中腹から御着城址やその西側を大きく蛇行しながら流れる天川を撮影したものです。

登山口にあった説明板によると、この「火山」は標高 166.8m で、別名神楽山・樋山・南山ともいい、天正 7（1579）年羽柴秀吉が御着城を攻める際に陣を布いた山だそうです。

城の手前を天川が流れていて攻撃するのにちょっと邪魔ではありますが、約 900m 北にある御着城を一望でき、陣を布くには絶好の場所です。

現在、火山は御着南山公園として遊歩道が整備され、ハイキングコースになっています。



写真-2 天川に架かる御着南橋から火山を望む

■ 羽柴秀吉、播磨平定に向けて御着城を攻める

戦国時代に入ると、御着城の小寺氏を含む播磨の豪族は西の毛利氏、東の織田氏といった大勢力に挟まれ、単独での存続は難しく、どちらかの勢力に味方することで存続を図るようになります。そのような状況の中、天正 5（1577）年織田信長の中国地方攻略の一環として羽柴秀吉が播磨へ侵攻しようとしていた時、御着城主・小寺政職（まさもと）は家老の小寺官兵衛孝高（よしたか：黒田官兵衛孝高のこと）の進言により、織田氏に付くことを決めます。

ところが、天正 6（1578）年 7 月、織田家の重臣で摂津国を任されていた荒木村重が信長に反旗を翻し、伊丹・有岡城に籠城します。村重と旧知の関係だった官兵衛は村重を翻意させるために同年 10 月、有岡城に乗り込みますが、主君・小寺政職の裏切りにより土牢に幽閉されます。有岡城は守りの堅い総構えの城であったため持久戦になります。

御着城址公園内にある案内板には、次頁の地図のような「御着城跡縄張推定図」があり、これによって御着城の全体像をつかむことができます。

この図は、かつて本陣だった天川家に、江戸時代の宝暦 5（1755）年に描かれた「播州飾東郡府東御野庄御着茶臼山城地絵図」が残されていて、これを基に描かれたものです。この図によると、かつての御着城はまず本丸を囲む内堀があり、北東側に二ノ丸が隣接しており、その外側には三重の堀が描かれています。また城の南西側は天川を天然の外堀として利用しており、西国街道や城下町をすっぽり取り込んだ総構えの平城となっています。

絵図は、御着城が天正 8（1580）年廃城（天正 7 年説もある）になってからおよそ 180 年後に描かれたものですが、今に残る堀の遺構や昭和 52（1977）～54（1979）年に行われた発掘調査で、建物の礎石や瓦、井戸、石垣、土塁、内堀などかつての御着城の遺構が発掘されており、基本的な縄張りは絵図のものがほぼ信頼できるといわれています。

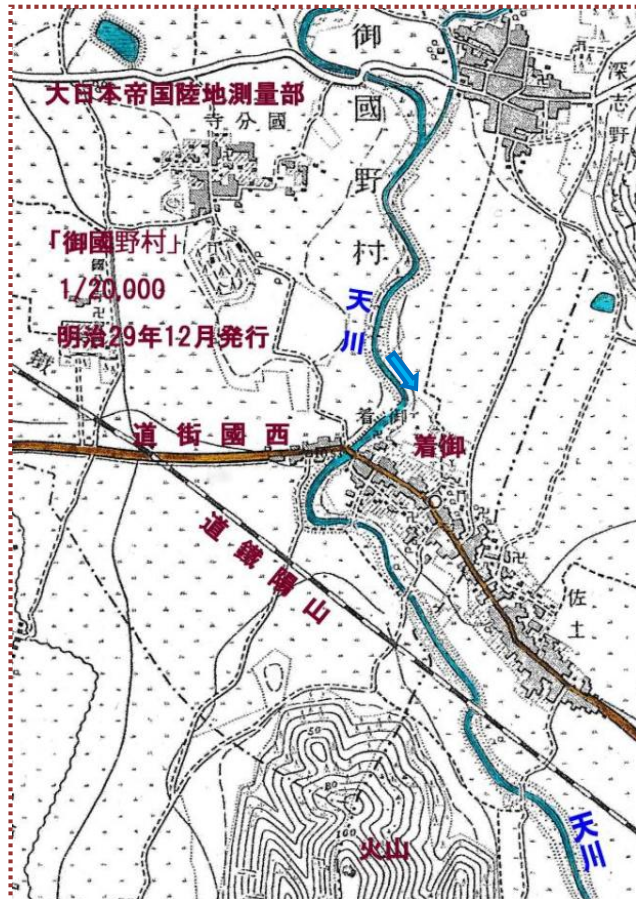


図-2 明治 29 年頃の御着城跡周辺の地図

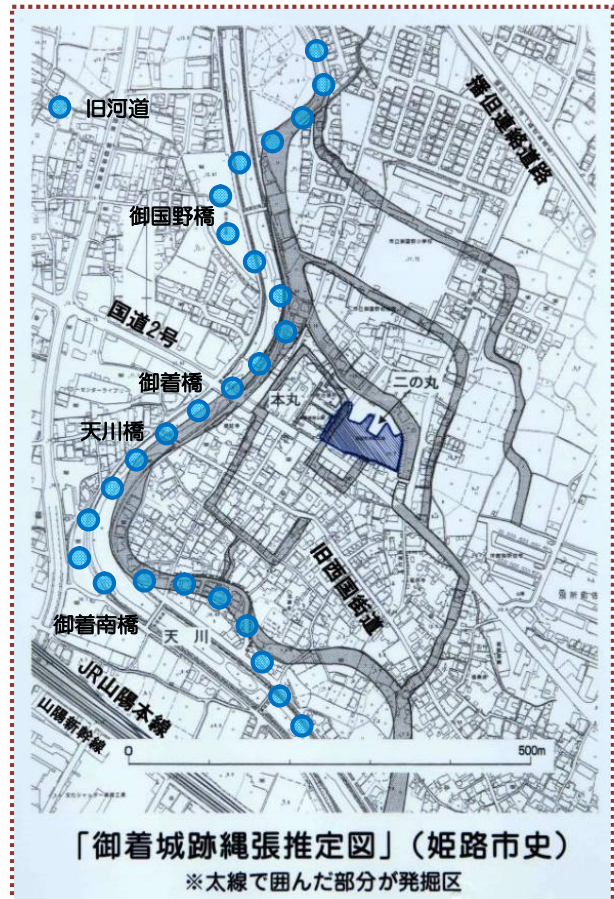


図-3 御着城跡縄張推定図

※ 図-3 において●が、現地の状況（廃川敷を公園化）や図-2 から、明治中期における天川の旧河道と考えられる。

■ 河川改修により蛇行が解消された天川

天川は蛇行の著しい河川でしたが、昭和 24（1949）年度に着手した中小河川改修事業により蛇行が解消され、概ね現在のような滑らかな法線になりました。しかし、昭和 51（1976）年 9 月の台風 17 号による豪雨で被災、この災害を契機に中小河川改修事業から激特事業に移行することになりました。

昭和 51（1976）年 9 月豪雨と同規模の降雨による再度災害の防止を図るため計画高水流量を改定して、河床掘削等により河積の拡大を図ります。事業区間は、高砂市曾根町曾根の古屋橋歩道橋を下流端、姫路市御国野町深志野を上流端とする L=7,600m でした。

また、激特事業の上流端である深志野よりさらに上流部も各所で決壊し甚大な被害が生じたことから、L=7,220m にわたり、災害復旧助成事業による改良復旧を実施しています。事業区間は姫路市御国野町深志野～飾東町小原。

なお、昭和 56（1981）年度から 60（1985）年度にかけて、激特、助成各事業の残工事分を小規模河川改良事業により施工しています。



写真-5 御国野橋上流の無名橋から
播但連絡道を望む



写真-6 御国野橋から天川上流を望む



写真-7 御国野橋を望む



写真-8 国道2号・御着橋から上流を望む



写真-9 御着南橋から上流を望む



写真-10 御着南橋から下流を望む

■ モノローグ

平成 26 (2014) 年の NHK 大河ドラマは『軍師官兵衛』。その年、姫路市域の官兵衛と縁(ゆかり)のある所では、「ひめじ官兵衛」と染め抜かれた幟(のぼり)が立ち、大勢の観光客で賑わいました。官兵衛の主君・小寺氏の居城だったここ御着城址にも大勢の観光客が訪れたのではないのでしょうか。

御着城址公園・本丸跡には「黒田官兵衛顕彰碑」があり、その横には目薬の木が植えられています。

司馬遼太郎の『播磨灘物語』では、官兵衛の祖父・重隆が広峯神社で暮らしていた時、「目薬の木」から目薬を作って売り、財を成したと記されています。



写真-11 黒田官兵衛 顕彰碑

その西側には官兵衛の祖父・重隆と母(明石正風の娘)の廟所があります。また、国道 2 号の南にある小公園には、小寺氏三代を祭った小寺大明神や『天川城址 小寺城主之奥都城^{※1}(おくつき)』の碑があり、碑の横には小寺政隆の歌碑が立てられています。

ふるさとよ 我らの古城をたずねて

しづかなる 姿のままにふるさとの 山川みえてかにかくれし 政隆

御着城址周辺を歩いていると、国道 2 号の南には山陽本線が走り、そのすぐ南の高架を新幹線が猛スピードで通過していきます。北の方には播但連絡道の高架が見え、それらの間を住宅やビルが埋めています。

今から 430 年以上前の様子などイメージしようがありません。蛇行を繰り返していた天川も河川改修により滑らかな法線に修正され、往時の姿を何とかとどめているのは火山くらいでしょうか。



写真-12 御着城本丸跡



写真-13 黒田家廟所



写真-14 『天川城址 小寺城主之奥都城』碑

※1 奥都城：上代の墓のこと。神道ではお墓のことを「奥都城」と呼ぶ。

【参考資料】

- 1 『日本の城郭遺跡』 BTG 城郭都市研究会 HP
- 2 『兵庫の河川事業～50 年の歩み』 兵庫県土木部河川課 平成 3 年 3 月
- 3 『昭和 51 年 17 号台風災害誌』 兵庫県土木部 昭和 53 年 3 月
- 4 『御着城、メグスリノキ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

メグスリノキ（目薬の木）

ムクロジ科カエデ属の落葉高木で、「長者の木」や「千里眼の木」、「ミツバナ」、「ミツバハナ」とも呼ばれる。日本国内のみに自生し、雌雄異株、大きいものでは樹高 10m に達する。葉は長さ 5～13cm 程度で、三枚の小葉からなる複葉。和名は、戦国時代頃から樹皮を煎じた汁を目薬として使用すると眼病などに効用があるとする民間療法があったことに由来する。樹皮にはロドデンドロールやエビ・ロードデンドリン、トリテルペン、タンニン、ケルセチン、カテキンなど多くの有効成分が含まれており、眼病の予防・視神経活性化・肝機能の改善などの効果があることが星薬科大学の研究により実証された。



写真-15 目薬の木

※発行：平成 29 (2017) 年 11 月 『ひょうご水百景』 No.78
改訂：令和 8 (2026) 年 5 月 『ひょうご水百景』 No.78